

## 子どもと保育の情景 (12)

# 子どもらしい解決の場面をめぐる

戸田 雅美

Aさんは、私のゼミの学生である。Aさんが行った実習園では、悪いことをしたら「ごめんなさい」と言うこと、「ごめんなさい」と言われたら、「いいよ」と言うこと、という決まりが徹底していたらしい。『ごめんなさい』と言ったのに、『いいよ』と言ってくれない』と泣いて訴えてくるなどの事態に戸惑ったという経験から、「形ではなく、心と心が伝わりあうようなコミュニケーション」について研究したいという難しいテーマをもって、私のゼミに入ってきた。そして、Aさんの問題意識である「心と心が伝わりあ

うこと」を、とても大切にしている保育者のクラスで観察し、記録を取るようになった。

幼稚園の三歳児五月のある日の出来事を、Aさんの記録と話をもとにまとめてみよう。

三歳児の部屋と、それに続く小さなホールでは、子どもたちが、思い思いに遊んでいた。Aさんが見ていると、ももかが、保育室で、遊具のお盆の上に、おもちゃのプラスチックのコップを丁寧に並べていた。何回かうまくいかずに倒れてしまい、やり直していたが、とうとう並べることが

できた。ももかはうれしそうにそれを持ってそつと立ち上がると、真剣な表情で、並べたコップを見ながら、しずしずと歩いて、ホールに入っていた。

その時、たまたま外に出ようと走ってきたたろうが、ももかにおつかつてしまった。大して強くぶつかつたわけではないので、ももかが転んだりはしなかつたのだが、持っていたお盆に乗せたコップが全部お盆の上で倒れてしまった。

ももかは、それを見ると、とても悲しそうな顔になり、たろうも困つたような表情になった。見ていたAさんも、ももかが泣いてしまいそうだ、どうしよう……という思いで、でも何もできずに見ていた。Aさんによると、「三人とも、固まつたまましばらく時間が止まつたような状態」だつたそうである。

すると、たろうがいきなり、倒れたコップの一

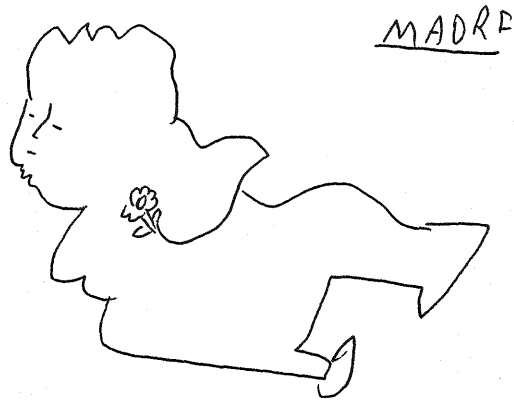
つを取り上げ、口に近づけて、中身を飲むふりをした。ももかは、じつとその様子を見ていたが、そのうちに表情が和らいだ。たろうは、ごく普通の様子で、コップをお盆の上に戻すと、何事もなかつたかのように、外に出て行つた。ももかもまた、何事もなかつたかのように、コップをお盆の上に並べ直すと、再び慎重に運んで行つてしまつたという。

Aさんが、このエピソードを話すと、聞いていたゼミの仲間と、「ももかは泣きそうな表情だつたのに、たろうが飲むまねをした後、なぜ表情が和らいだのか」という点が話し合いの焦点になつた。「ごめんねって言うこともなかつたのに、どうしてだろう」などという話し合いが続いた。メンバーの一人が「ももかはそもそも何がしたかつたのかしら」と聞くとAさんは、「特にホールで

ままごとをしていたわけではないし、ただお盆にコップを乗せて持っただけのこととしていたことはわかるのだけれど……」とのこと。

しばらくすると、また、別のメンバーが、「誰かに飲んでもらいたくて、運んでいたのかしら……」と言う。「そうだとしたら、ももかがもともと考えていた、誰かに飲んでもらいたいという気持ちに込めるようにたろうが飲んでくれたから、うれしい気持ちになったということ？」「そうかもしれないね」「でも、そうだとしたら、たろうは、そのことがわかっていて、飲むまねをしたのかしら？」「えー？ そうだとしたら、たろうには、どうしてもももかの思いがわかったのかしら？」と再びAさん。「ももかが泣きそうになったのを見て、とても困って、そこで考えたのかしら……」「そうだとしたら、三歳児なのにすごいね！」などと話し合いは続いた。

この解釈が、たろうとももかの気持ちをすべて適切に理解しているかどうかは、わからない。しかし、事実は、たろうが「ごめんね」と言うことはなかったのにもかかわらず、ももかの気持ちは和らぎ、互いに、すっきりして、それぞれが本来やりたかったであろうことに、納得して戻れたら



しい。つまり、少なくとも、たろうのその時の対応は、ももかにとっては、適切なものだったのである。

子どもたちを丁寧に見る機会さえあれば、三歳児よりもっと幼い子どもであっても、相手の気持ちを推測し、その相手の気持ちと自分の思いを調整しながら、より前向きな事態に転換していくような場面に出合うことがある。このためには、そのような場面に意義を見出し大切にする保育がその背景にあることが、大きな条件になる。たとえば、「ごめんね」「いいよ」の決まりが厳しい保育では、このような子どもの姿を見ることは難しい。なぜならば、大人のように、まずは謝っておく、とか、「大丈夫でしたか」と言うといった、形で対応することにたけていないことが、Aさんの話のような子どもらしい解決の場面を生み出しているという面があることは否定できないからで

ある。

最近、世の中全体が、契約社会になり、あらかじめ決まり事をつくっておいて、事が起こったらそれに従って行動するという流れが強くなっていることを感じる。それに伴って、その社会を生きる子どもも、早くからそのような方に慣れることが必要だという考えも力をもってくる可能性は大きい。子どもらしい試行錯誤よりも、効率のよい対応が早くできて悪いことはないだろうという考えも力をもつてきそうである。

子どもが、子どもらしく考えたり、子どもらしい解決がはかられていくという、そんな人間らしい成長の機会が奪われない保育の意味を、子どもの傍らにいる大人として、繰り返し考えていきたい。学生達の熱い議論に加わりながら、そんな思いを強くすることになった。

(東京家政大学)